仕事が見える 仕組みが見える

もはや「未来」ではない――到来・デジタル印刷実用期

受注はすべてインターネット経由。印刷加工にはデジタル機材をフル活用。仕上がった商品は全国各地へ宅配便で発送―。最新の技術とソリューションを組み合わせたビジネスモデルに賭け、ラベル・ステッカーの印刷通販事業を展開する企業が国内にも現れた。名勝・恵那峡の間近に本社工場を構える㈱デジタ（岐阜県恵那市大井町、藤下和也社長、☎0573・25・2340）を訪ね、独自のビジョンに迫った。

デジタ

「年商は現在3億円弱で、先行する印刷通販やラベル印刷の大手と比べればまだまだ。長い間思い描いていたビジネスが、ようやく機能し始めたところだ」。一昨年10月に移転新設し、現在も間仕切りを追加するなど手を入れている途中という工場で、藤下社長は今日までの足跡を振り返った。

藤下社長が印刷業を始めたのは2001年。国内2号機というA3判のCTP一体型オフセット機をまず導入した。それまで、印刷と直接関係ない写真館を経営しており、少子化で写真撮影の需要が落ち込むことを見越しての業態転換だった。社名も改め、現在の源流となる「㈲デジタグラフィックス」に。デジタル技術を使った事業がいずれ一般化しても独自性が残るようにと、あえて「ル」を取ったネーミングだった。

目指したのは「地方にいながら、東京とのギャップを埋めること」（藤下社長）。写真専門学校時代にRGBをCMYKに変換する色分解を学び、写真館の仕事でも画像修正にMacを使うなど、プリプレスに関連する知識と経験はあった。そこへ折しも、CTP、インターネットという新たな利器が登場。遠隔地からの新規参入でも、国内最大の印刷需要地とのビジネスが可能になったと判断し、デザイン会社などをターゲットに設定。小ロット印刷を請け負う出力センターとしての利用をアピールした。

だが現実は違った。当時、デザイナーの多くは、データの媒体を持ち込める近場の出力センターをひいきにし、オンライン入稿に対応しないケースが予想以上に多かった。しかも、導入したオフセット機は意図した業態には過大な設備だった。低単価な大ロットのチラシ、パンフレットも引き受けて休みなく操業したが採算に苦しみ、オフ機はフル稼働がたたって途中で故障。入れ替えを強いられるなど、苦労が絶えなかった。

ただ、厳しい状況にあってもなお、無形のデータに形を与える「出力センター」へのこだわりは変わらなかったという。ブロードバンドが普及し、ネットショッピングが一般化したことを追い風に、受発注から入稿、決済までをネットで完結できる印刷通販に活路を求めた。有望な参入分野を検討した末、選んだのが屋外用ステッカーなどのシール印刷だった。

藤下社長の長男、次男である卓己専務、知也常務らも加わり、受発注から工程管理、発送処理までをオンライン化するシステムを自前で構築。ワイドフォーマットのインクジェットプリンタ（IJP）、カッティングプロッタなどを導入し、09年2月「印刷通販デジタ」を開設した。

今度は波に乗った。「24時間操業を3年間続けるIJPがある」（知也常務）ほどの鉱脈を掘り当てたステッカーに加え、顧客の声から、食品向けなどのラベルにも需要を見いだした。デジタルラベル印刷機の設置を前提に社屋を新築し、昨年1月、ヒューレット・パッカードの「HP Indigo ws4050」「同4500」を導入。両機に必要な表面基材のプライマー処理には㈱ビーエヌテクノロジーのコーティング専用機を導入した。正社員を新たに10人採用して陣容も拡大、さらに現社名の株式会社に改組した。

ラベル部門は「ステッカーとして発注されていた分が流れた面もある」（卓己専務）ものの、売り上げで既にステッカーを上回っている。発注は100枚前後から5万枚程度まで分布し、ボリュームゾーンは1万枚前後。HP Indigoが1ジョブで印刷する平均枚数は約5000枚という。紙系および合成紙、透明PETで全10種の表面基材に対応し、段取りや面付けの工夫で作業を効率化。後加工の主力はカッティングプロッタだが、人海戦術での断裁や、ロータリーダイによる抜き加工を行う場合もあるという。

IJPでのステッカー印刷、HP Indigoによるラベル印刷、3メートル幅の大判プリンタによる出力サービスは、それぞれ別工程で、稼働状況に差があっても仕事の融通はしない。さらに、数社の製品を導入しているIJPは、リピート品の印刷を極力同じ機種で行うようにしている。

「一時期手がけたオフセット名刺印刷と異なり、ラベルはエンドユーザーからの注文のほか、デザイン会社経由の受注が多い。ステッカーでは一層その傾向が強い」と説明するのは、通販事業部統括責任者の保母祥吾氏。プロの目は仕上がりに厳しく、使用機種の違いを指摘される可能性が高い。「効率面では、余裕のある設備へ順に振り分けるのが理想だが、リピート品の再現性も無視できない。現状の運用はまだ完璧とはいえず、模索を続けているところ」（知也常務）という。

従業員数36人、正社員の平均年齢は30歳を下回るという若い会社で、既に実務の多くを息子世代に譲り、スマートフォンアプリなどの新規事業も任せている藤下社長だが、「分析と発想は息子たちにも負けない」と自負する。デジタル機をラベル生産に活用するポイントは何か。ラベルという商品は今後も有望か。新規参入組からの見解をと尋ねると、こう答えた。

「当社の場合、注文の受け付けと管理、発送にいたるシステムを構築し、多くても3000枚程度というステッカー印刷から始めたことでデジタル印刷機を活用できた。仮にレタープレスで相応の設備を持っていたならば、工程や仕上がりの統一を重視し、小ロットまで版を起こして生産することを選んだかもしれない。オンデマンド印刷の成否も、生産設備よりは受注の仕組みづくりによるところが大きいと感じる」

「電子媒体に押される他の印刷物と違い、品物と共に必要とされるラベルは確かに有利。ただ、画像認識機能付きのウェアラブル端末などに一部を取って代わられる時代が、遠からずやって来るだろう。そのことを念頭に、次の事業展開も考えているところだ」

ネット通販システムと統合

実務を担う（左から）藤下知也常務、卓己専務、保母祥吾氏

同社のラベル印刷通販サイト

導入した「HP Indigo ws4500」は、「同4050」との２台体制で運用

昭和パック㈱（栃木市平柳町、谷中宏太郎社長、☎0282・24・6000）は2012年、エプソンの「SurePress L―4033A」を導入。その先進的な活用方法が注目を集めている。同社ではシュアプレスと凸版間欠機の間を同じジョブが行き来する。

昭和パック

「現場を最適に運営するためには、どうしてもSurePressが必要だった」というのは製造の責任者である村井信一常務の言葉だ。

同社の受注するボリュームゾーンは1万～5万枚で、近年のラベル印刷業界の平均を大幅に上回っている。生産の中心は凸版間欠機。現在は発注数量が1万枚以上のラベルを製造している。

かつてはこの1万枚以上のジョブの間に急ぎの数千枚という仕事が挟み込まれていた。

村井信一常務

枚数の少ない仕事は、印刷自体は数分で終わるのだが、準備時間は大量のものと同じ。このために工場内のジョブスケジュールが交通渋滞を起こすこともたびたびであったという。

このジョブの交通渋滞を解消するためにSurePressが活用されている。同機は少量生産に向くという印象があるが、同社では1000枚から1万枚という比較的多めの枚数で利用している。数枚などという極小ロットはサンプルの作成以外にはほとんどない。

しかし、凸版間欠機を1万枚以下の仕事から解放することで、ジョブのスケジュール進行は飛躍的にスムーズになった。

自動車で言えば、凸版間欠機は高速道路、SurePressは一般道という区分け。鉄道で言えば、複々線化し、特急や急行の通り道を空けたような格好だ。

驚くのはコンベンショナル機とアナログ機の間を仕事が行き来することだ。

大量ならコンベンショナル、少なければデジタルという、作業効率やコストを考えると理想的な展開を実現している。

デジタルと凸版二刀流

従来はコンベンショナルとデジタルの風合いや品質の違いにより、既存のジョブがこの間を行き来することはほぼなかった。

村井常務は「さまざまなデジタル機がある中で、SurePressの最も優れている点は、凸版間欠機に風合いも品質も近いこと」と導入時に選択した理由を振り返る。

この風合いの近さはブランドオーナーにも受け入れられた。印刷機を変更するとなれば1品あたりのラベルの発注数量も売れるものと売れないもので格差がつけられ、全体の発注数も減少する。同社にも同様の仕事が舞い込む。

例えばコンビニなどで販売されるおにぎりのパッケージは、同一ブランドなので似たようなデザインに統一しつつ、中身の具によって色と商品名を変える必要がある。

また、販売数の多い商品のラベルは多く、それほど出ない商品のラベルは少なくといったように1品の数もバラバラに設定される。

ブランドオーナーが小売店などのプライベートブランド（PB）で開発した商品では、中身はほぼ同じでもPBによってラベルだけ、微妙に変えて出荷しているケースもある。このためロットの大きい軟包装を使いづらく、ラベルを必要とすることが多い。

さらには季節によってデザインの変更も多々ある。特に短期キャンペーンでは同社のラベルが活躍する機会が多い。プロ野球の優勝・応援セールなど数日で販売機会が終わってしまう場合などはラベルでの対応は主道という。

こういった商品だが、食品加工メーカーからの納期指定は明日や明後日などということもたびたび。彼らの得意先であるスーパーなどからの発注が急なためだ。これらの工程が複雑になりそうな仕事をスケジュールに割り込ませながら滞りなく出荷しなければならない。

こういった要求に的確に応えられることもSure Pressの強みだ。

デジタルの効果

「明日までにこのラベルを1000枚だけ」

このせりふは営業マンにとって製造現場に言いづらいものだ。同社でもデジタル印刷機導入前には、口にすることがはばかられる内容だった。生産現場への負担やコスト面での折り合いが厳しいことが分かりきっているからだ。いわばお付き合い仕事。しかし、同社ではこれを躊躇なく受けられるようになった。

「営業担当者に自信が出た」と村井常務。少ない枚数でもSurePressが何とかしてくれる。そんな思いが、受注にためらいがなくなったのだ。

また、同社ではデジタル印刷機導入後に単価計算の方法を見直し、より正確な数字を出せるようになった。これによるとデジタルとコンベンショナルの使い分けをする数量は考えていたよりも多い枚数であることも分かったという。

SurePressは現在フル稼働。ただし「印刷速度が速くはないので、営業時間いっぱいに使ってやっている」（現場担当者）という事情もある。この点は村井常務も不満に思っている点だ。

同社は現在、新社屋を建設中で、今年6月には完成する。

村井常務は「これまで手狭で仕事をするスペースに余裕がなかったが、これにより、仕事環境は大幅に改善する。デザイナーを大切にする当社だが、デジタル印刷機導入で自由度が高まり、デザイナーの活躍の範囲も広がった。さらに力を発揮していきたい」と期待を込める。

在版でも凸版間欠と使い分け可能

1ジョブが1,000～1万枚以下をSurePressで印刷する

温度・湿度管理を徹底し、同じ条件での出力を心がける

株式会社プレートメーキング　信頼されるモノづくりへ…
新SCREEN製CTP入荷!! Plate Rite FX870ⅡE
新POD機入荷　品質向上（1200dpi）封筒印刷もできます
製版部門：CTP樹脂凸版／CTPフレキソ版／亜鉛凸版／樹脂凸版／各種輪転版
刃型部門：硬質刃／ミラー刃／フッ素刃／パイプ刃／ミシン刃／マイクロミシン刃
オンデマンド印刷：DTPデータ出力／デザイン／版下／デジタル印刷／大判インクジェット印刷／各種バーコード
〒462-0063 名古屋市北区丸新町489番地 TEL(052)901-4649 FAX(052)902-5532
E-mail:pmk@platemaking.co.jp http://www.platemaking.co.jp/

シール印刷大阪府協同組合 青年部
部長 金光雅志　副部長 北村吉弘
副部長 小原隆　会計 佐藤一生
部員一同

日本フォーム印刷工業連合会
JAPAN BUSINESS FORMS ASSOCIATION
会長 櫻井醜
〒104-0041
東京都中央区新富1-16-8 日本印刷会館内
TEL 03-3551-8615　FAX 03-3555-8466
URL http://www.jfpi.or.jp/JBFA

謹賀新年
2014年1月1日

全国ネームプレート工業協同組合連合会
会長 上原洋一
事務局 〒110-0012 東京都台東区竜泉1-28-4
TEL 03-3874-6121 FAX 03-3875-0658
URL http://www.tnp.or.jp E-mail:jimu@tnp.or.jp

当青年部の『今年の漢字一文字』を1月に行ってみました....
共
東京都正札シール印刷協同組合青年部

JS
未来を 創造する 仲間
仲間と 想像する 未来
全日本シール印刷青年部協議会
各青年部では随時新入部員を募集しています。
facebook URL http://www.facebook.com/js.sealprint